

明代初期の八股文について (9)

The Eight-legged Essay in the early Ming Dynasty (9)

滝 野 邦 雄
Takino, Kunio

さらに、劉嗣固（字は正夫。江西弋陽の人）は、康熙四十九年〔一七一〇〕序・乾隆十一年〔一七四六〕増訂『纂補四書大全』において問答形式で次のように理解する。

まず、この章は、孟子が道統の受け継いだことを自任し、自分を「見知」に属しているようにしているという。そして、第一節について、

「之を知る」とは何か。

長い歴史の中でどうして数人のみしか道統を会得できなかったのか。

道統をいうのになぜ堯・舜より始めるのか。

禹・皐陶はどうして道統を会得したのか。

湯はどうして会得したのか。

必ず禹・皐陶の「見知」があって後に、湯の「聞知」があったのか。

という問いを立てて、次のように検討を行なう。

問う、此の章の旨は何ぞや、と。曰く、此れ孟子 斯道の傳を自任す。幸いに孔子を去ること未だ遠からず、而して猶お「見知」の列に在るがごとくす、と。○問う、所謂ゆる「知之（之を知る）」とは、何ぞや、と。曰く、[朱注で引用する] 尹氏 謂う「知とは乃ち其の道を知るなり」、と。問う、道は大路の如く、人人 知る可し。何を以て遙遙たる古今に之を知る者 獨り此の數人ならんや、と。曰く、此の道 至りて常なるも、却って至りて精微なり。事事物物の中に皆な箇ひとつの恰好の不易の理有り。而して然る所以の者は、皆な天理の自然に本づく。賢・不肖の及ばざる者は、既に苟且（一時の間に合わせ）に安んじ以て此れを知るに足らず。賢知の過ぐる者も、

又た高遠なるに驚き、亦た以て此れを知るに足らず。間に之を知る者有るも、亦た「擇びて精^{くわ}しからず、語りて詳^{つまび}らかならず」（韓愈「原道」）して以て此の中の精微を究むるに足らず。此れ遙遙たる千古にして之を知る者は獨り此の數人なる所以なり、と。○問う、道を言うに何を以て堯・舜より始む、と。曰く、之を『書經』の「虞書」に考うるに、堯・舜に命じ、而して「允執厥中（允に厥の中を執れ）」（『論語』堯曰）と曰い、舜禹に命じ、而して「人心惟危、道心惟微、惟精惟一、允執厥中（人心惟れ危く、道心 惟れ微なり、惟れ精に惟れ一に、允に厥の中を執れ）」（『書經』大禹謨）と曰う。「中」とは即ち「道」なり。乃ち天理の自然の恰好の不易なる者なり。「中」の一字は、堯・舜より始めて之を發す。故に道を言えば必ず堯・舜より始む、と。○問う、禹・皋陶 何を以て之を知るや、と。曰く、胡雲峯（元・胡炳文。字は仲虎、号は雲峰。安徽婺源の人）謂う、禹は洪範にして九疇を敘し、皆な皇極を要す。皋陶は謨して秩・敘を陳し、討を命ず（皋陶謨）。皆な天理に歸（歸）す。是れ皆な天理の自然なる者は、見て中道の果たして易うる可からざるを知る有り。故に「之を知る」と曰う、と。○問う、湯 何を以て之を知るや、と。曰く、「仲虺〔之誥〕」を觀るに、湯 「中を民に建つ」と説い、湯 誓いて乃ち「惟れ皇なる〔上帝〕、衷を〔下民に〕降し、恒有るの性に若う（蔡傳に「皇は大、衷は中、若は順なり）」（『書經』湯誥）と曰う。衷とは、中なり。蓋し事事物物の中 此の衷に由りて出づるに非ざる莫し。此の衷なるや、乃ち皇なる〔上帝〕 之を降し、天理の自然に非ざる無きなり。故に「之を知る」と曰う、と。○問う、必ず禹・皋陶〔陶〕の「見知」有りて、而して乃ち湯の「聞知」有りや、と。曰く、非なり。此れ理は自ずから天地に在り。存容・泯滅 必ず之を知る者有り。但だ聖と時を同じくする者は、則ち「見知」と爲し、聖と時を異にする者は、則ち「聞知」と爲す。堯・舜より湯に至る五百年の間、筭（計算）し來れば、其の「見知」と稱する者は、禹・皋陶の若き是れなり、而して「聞知」と稱する者は、

湯の若き是れなり。^{ふた}兩つの「若」字を玩（深く味わう）すれば，「見知」・「聞知」の語 固より平列す。「見知」・「聞知」[の二つとも] 總じて必ず有り，無きに非ずと謂うなり。「見知」を側重（偏重）する者は，是^ぜに非ず，と（康熙四十九年〔一七一〇〕序・乾隆十一年〔一七四六〕増訂『纂補四書大全』下孟・卷二十・九十四葉～九十五葉・「孟子曰，由堯・舜至於湯，五百有餘歲。若禹・皐陶，則見而知之，若湯，則聞而知之」条）。

第二節では、

重ねて湯から文王にいたる「見知」・「聞知」のことを言うのはなぜか。

伊尹・萊朱はどのようにして「見知」したのか。

文王はどのようにして「聞知」したのか。

という問いを立てて、次のように検討を行なう。

問う、又た「由湯至於文王」一段を言うは何ぞや、と。曰く、此れ又た湯より文〔王〕に至る五百年を以て算^{けいさん}し來りて、「見知」・「聞知」の必ず有るを知るなり。其の「見知」と稱する者は、伊尹・萊朱が若き者は是れなり。其の「聞知」と稱する者は、文王の若き是れなり、と。○問う、伊尹・萊朱は何を以て「之を知る」と爲すや、と。曰く、伊尹は「善に常師^{ママ}（主）無し、克く一なるに協う」（『書經』咸有一德）と曰う。「一」は天理の自然にして恰好の不易にして云う所の「中」なる者に非ざるか。仲虺之誥に「中を民に建つ」（『書經』仲虺之誥）と曰うは、其の中道の不易なる者に于いて固より之を知るなり。故に二人 皆な「之を知る」と曰う可し、と。○問う、文王 何を以て「之を知る」と爲すや、と。曰く、『詩〔經〕』に「緝熙敬止（緝熙にして敬止す）」（『詩經』大雅・文王）と言う。「止」とは、何ぞや。「至善」なり。卽ち天理の當然にして云う所の「中」なる者なり。文王 敬せざる無くして止まる所に安んずれば、則ち事事 皆な天理の自然に合し、「中」を得ること知る可し。故に「之を知る」と曰う、と（康熙四十九年〔一七一〇〕序・乾隆十一年〔一七四六〕増訂『纂補四書大全』下孟・卷二十・九十五葉・「由湯至於文王，五百有餘歲。若伊尹・萊朱，則

見而知之，若文王，則聞而知之」条)。

第三節では、

さらに重ねて文王から孔子にいたる「見知」・「聞知」のことを言うのはなぜか。

太公望・散宜生はどのようにして「見知」したのか。

孔子は庶民でありながらどうして堯・舜・湯・文王の道統を直接得ることができたのか。

禹・皋陶・伊尹・萊朱・散宜生・太公望は、ほんとうに「見知」によって道統を得、湯・文王・孔子は、ほんとうに「聞知」によって道統を得たのか。

という問いを立てて、次のように検討を行なう。

問う、又た「由文王至於孔子」一段を言うは何ぞや、と。曰く、此れ又た文王より孔子に至る五百年間を以て筭^{けいさん}(計算)し來りて、「見知」・「聞知」の必ず有るを知るなり。其の「見知」と稱する者は、太公[望]・[散]宜生の若き是れなり。其の「聞知」と稱する者は、孔子の若き是れなり、と。○問う、太公[望]・[散]宜生 何を以て「之を知る」と爲すや、と。曰く、太公[望]の丹書の訓に「敬 怠に勝つ者は吉、義 欲に勝つ者は從」と曰う①。所謂ゆる「義」とは、乃ち天理の當然にして恰好の「中」を得る者なり。『書[經]』に「迪彝教^{つね}(彝なる教を迪く)」(『書經』君奭)と曰うは、則ち彝倫(常理)の教えなり。散宜生は蓋し焉^{こゝ}に力有り。是れ亦た天理の當然なる者に于いて見る有るなり。故に皆な以て「之を知る」と爲す、と。○問う、孔子は匹夫にして何を以て直ちに、堯・舜・湯・文[王]の傳に接せんや、と。曰く、位に上下有りて、理に上下無し。堯・舜・湯・文[王] 位を得て上に在り。其の秩・序・命・討^{これ}の諸を天下に布する者は、天理の當然の「中」に非ざる無し。孔子は位を得ず下に在り。其の用・舍・行・藏^{これ}(『論語』述而)の諸を一身^{しめ}に見ず者は、天理の當然の亦た「中」に非ざるは無し。故に孔子の接する所は、便ち是れ堯・

舜・湯・文〔王〕の緒なり。〔孔子が〕匹夫〔であること〕を以て之を疑うを得ず、と。○問う、禹・皐〔陶〕・伊〔尹〕・萊〔朱〕・散〔宜生〕・〔太公〕望は、果たして「見て知る」に因り、湯・文〔王〕・孔子は、果たして「聞きて知る」に因るか、と。曰く、朱子 謂えらく「禹・皐〔陶〕の徒は、本より皆な名世の生^{ママ}(士)。伊尹と太公〔望〕とは曰^{ママ}(又た)皆な^{ママ}(『四書或問』『曰皆』作「又」)湯と文〔王〕との師なり。必ずしも其の君を見て始めて「之を知る」に非ざるなり。湯・文〔王〕・孔子は、又た皆な(『四書或問』『皆』作「或」)生知の聖なり。亦た未(『四書或問』『未』作「非」)だ必ずしも前聖の道を聞くに因りて(『四書或問』『困』字無し)始めて「之を知る」にあらず。此れ「見て知る」・「聞きて知る」といふう者は、蓋し時を同じくするを以て之を言え、則ち斯道の統は臣 當に君を以て主と爲すべく、世を異にするを以て之を言え、則ち斯道の傳は後世 當に前聖を以て師と爲すべきなり」と(『四書或問』卷十四・「或問卒章之說」条)。泥看する勿れ、と(康熙四十九年〔一七一〇〕序・乾隆十一年〔一七四六〕増訂『纂補四書大全』下孟・卷二十・九十六葉・「由文王至於孔子、五百有餘歲。若太公望・散宜生、則見而知之、若孔子、則聞而知之」条)。

①『四書或問』大學傳二章・「盤之有銘、何也」章に「……其後周之武王、踐阼之初、受師尚父丹書之戒、曰敬勝怠者吉、怠勝敬者滅。義勝欲者從、欲勝義者凶……」。また、『朱子語類』卷十七・大學四或問上に「問、丹書曰、敬勝怠者吉、怠勝敬者滅。義勝欲者從、欲勝義者凶。「從」字意如何。曰、從、順也。敬便堅起、怠便放倒。以理從事、是義、不以理從事、便是欲。這處敬與義、是箇體・用、亦猶坤卦說敬・義。寓」。

では、この箇所はどのように理解して八股文を作成してゆけばよいのだろうか。清初の陸隴其(初名は龍其、後に隴其に改める。字は稼書、諡は清獻。浙江平湖の人。明・崇禎三年十月十八日〔一六三〇年十一月二十一日〕～康熙三十一年十二月二十七日〔一六九三年二月一日〕。康熙九年庚戌科〔一六七〇〕二甲

七名の進士)の『四書講義困勉錄』(康熙三十八年〔一六九九〕序)に引用する呉默(字は因之、又の字は無障。江蘇呉江の人。萬曆二十年壬辰科〔一五九二〕二甲三名の進士。會試の會元)や明・徐倣絃の議論を見ると次のようになっている。

由堯舜至於湯章總旨 吳因之(吳默) 曰く、堯・舜より湯・文[王]・孔子に至るは、皆な前に「見知」有り、而して後に「聞知」有り。乃ち今[の孟子の時になって]既に「見知」無ければ、[後世に]安くんぞ「聞知」有るを得んや。通章の口氣 原より是れ此の如し。説く者「見知」を重んずと謂うは信なり。然れども此の書するの旨 本より道の其の傳を失うを憂うるが爲に發す。前聖の道 皆な傳うる所有り、而して後聖の道遂に傳うる所を失う。寧(いず)くんぞ深く憂う可からざらんや。是れ一篇の立言の歸束(結末)の處は、又た「聞知」の上に在り。大抵、「見知」なる者は、各節の語次の重んずる所なり、而して「聞知」なる者は、則ち通章の脉絡の究竟(最終的)に重んずる所なり。若し専ら「見知」を重んじ、軽く「聞知」を看れば、則ち是れ道統の由り傳わる所を推し、道の其の傳わるの本旨を失うを憂うるに非ず、と(『四書講義困勉錄』孟子講義困勉錄・卷十四・盡心下・四十三葉・「由堯舜至於湯章總旨」条)。

呉默は、「見知」・「聞知」を問題にする。堯・舜から湯・文王・孔子にいたる道統の繼承は、まず「見知」によって伝えられ、それによって「聞知」して伝わる。孟子自信が「見知」して伝えなければ、どうして後世に「聞知」して伝えるものが出るだろうか、というのがこの章全体の語気である。そのため、「見知」を重視するということは、信すべき(確かな)ことである。しかし、この章は道統が後世に繼承されなくなってしまうことを憂えて述べられている。この章の最後は、孟子より後の人の「聞知」にかかわっている。そもそも、それぞれの節で用いられる「見知」は、各節のなかで重視されているし、「聞知」は、最後に孟子が後世の人の「聞知」を憂えるという文章の流れから、最終的に重んじているものである。もし、「見知」を重視し、「聞知」を軽視し

たならば、道統の継承を述べ、それが失われてしまうということを憂うという意味ではなくなってしまう、という。呉默は、この章では、「見知」を重視しつつ、「聞知」も軽視してはいけないというのである。

明・徐倣絃は次のような解釈をする。

由堯舜至於湯章 徐倣絃 曰く、時説『孟子』の「然而無有乎爾、[則亦無有乎爾]」二句に因り、遂に以爲らく「見知」なる者の之を前に續くこと有るに非ざれば、則ち「聞知」なる者も亦た以て之を後に得る無し、と。[これは] 本旨に非ざるに似たり。孟子の語意は、只だ某は是れ「見知」、某は是れ「聞知」と云うのみ。是れ道統の一脉の相い承け、^{これまで}從來は兩項（「見知」・「聞知」）の人 接續して斷たざるを論ず。末節に至りては、今世を嘆ずること、「見知」無く、其の脉 已に斷了すれば、則ち後世「聞知」無きを諒とするが若きなり。其の意は只だ是れ此の如し。「聞知」なる者は、必ず専ら「見知」に^か藉りて以て之を啓くと謂うに非ざるなり。○徐[倣絃]の説は是れ専ら主とするに心もて相い傳うるの意を以てす。故に此の解有り（『四書講義困勉錄』孟子講義困勉錄・卷十四・盡心下・四十三葉～四十四葉・「由堯舜至於湯章」条）。

いまは、末の二句の「然而無有乎爾、則亦無有乎（それなのに今「見知」する者がなかったならば、五百年餘のあとには「聞知」する者があるだろうか）」によって、まず「見知」があり、その「見知」に基づいて「聞知」して伝わると考える。しかし、これはその本旨ではないようだ。孟子のいう「見知」・「聞知」は、誰が「見知」で誰が「聞知」であると言っているにすぎない。ここまでは、道統が断絶せずに継承されてきたことを論じている。そして、末節で孟子の今の世になって「見知」するものがいなくなり、その継承が断たれてしまったので、後世には「聞知」する人がでないことを理解してもらいたいと嘆いているのである。道統の継承は、まず「見知」によって伝えられ、それによって「聞知」して伝わるというものではない、というのである。徐倣絃は、「見知」・「聞知」には軽重の差はないと考える。それに関して陸隴其は、これ

は「心もて相い傳うるの意」を主として導きだされてきた理解だ、という。

また、何如滄（廣東南海の人。雍正十一年癸丑科〔一七三三〕三甲二十六名の進士）は、『四書講義自得錄』（乾隆二十五年（一七六〇）序）で、次のように述べる。

愚〔以下のように〕按ず。此の章 時説は「見知」を側重（偏重）せざるは無し。前面に「見知」の人有るに非ざれば、後の人は如何に之を聞く、と謂うなり。其の説は『〔朱子〕語類』（『朱子語類』卷六十一・孟子十一・盡心下・「由堯舜至於湯章」条）に引く三山の林少穎（林之奇）の説及び『〔朱子四書〕或問小註⁽¹⁾』に本づく。然れども竊かに謂えらく、「聞きて之を知る」者は、湯は堯・舜に聞き、文王は湯に聞き、孔子は文王に聞く。之を禹・皐〔陶〕・伊〔尹〕・萊〔朱〕・〔太公〕望・散〔宜生〕に聞くに非ざるなり。夫れ禹・皐〔陶〕と伊〔尹〕・萊〔朱〕と〔太公〕望・散〔宜生〕とは、堯・舜と湯と文〔王〕と並びに一時に生ず。若し湯・文〔王〕・孔子 之を禹・皐〔陶〕諸人に聞くと謂えば、豈に禹・皐〔陶〕諸人無ければ、便ち之を堯・舜・湯・文〔王〕に聞く能わざらんか。其の理 固より已に通じ難し。況や本文の「若禹・皐〔陶〕」・「若湯」・「若伊〔尹〕・萊〔朱〕」・「若文王」・「若〔太公〕望・散〔宜生〕」・「若孔子」の六個の「若」字は、原より是れ平平として並列す。時を同じくして若而人（此の如きの人：『春秋左氏傳』襄公十二年）有り、世を異にして若而人（此の如き

(1)『四庫全書總目提要』に、

舊本「朱子撰」と題す①。宋以來、諸家の書目 皆な著録せず。諸儒の朱子の學を傳うる者も亦た一人の之に言及する無し。康熙壬午（康熙四十一年〔一七〇二〕）に始めて陳彝則の家刻本有りて、明の徐方廣の増註する所と稱す。越えて二十年、壬寅（康熙六十一年〔一七二二〕）に鄭任鑰 又た重刻し、附するに己が説を以てし。併せて後序を作る。……近人の依託と爲ること疑い無し……（『四庫全書總目提要』卷三十七・經部三十七・四書類存目・「或問小註三十六卷」条）。

①『四庫全書總目提要』凡例に、「大抵 灼として原帙を爲す者は、題に「某代某人撰」と曰い、灼として贋造と爲る者は、題に「舊本題某代某人撰」と曰う。と言う。『朱子四書或問小註』は、朱子の著作ではなく、「近人の依託」であるとするのである。

の人：『春秋左氏傳』襄公十二年）有りて、皆な之が統を知るに與かるを得と謂うに過ぎざるのみ。並びに未だ嘗て惟だ禹・皐陶のみ「見て之を知る」の故に湯「聞きて之を知る」を得と云わざるなり。大意は「以下のように」謂う。五百年の間、時を同じくすれば必ず「見て之を知る」者有り、世を異にすれば必ず「聞きて之を知る」者有り。今、我れ孔子と時を同じくせずと雖も、然れども居 既に近く、時 亦た未だ遠からざるに居れば、即ち是れ時を同じくすると一般（おなじ）なり。若し今日 已に「見知」の人無ければ、則ち五百年の後は時世遙かに遠し。豈に復た「聞知」の人有らんや。蓋し孟子は明らかに「見知」を以て自任し、而れども質言（直言）するに便ならず。故に反言し以て其の必ず有るを決するなり……（『四書自得錄』下孟自得錄卷之十・五十葉～五十一葉・「由堯舜至於湯章」条）。

いまでは、「見知」を重視し、道統の継承は、「見知」の人がいなければ、どうして後に「聞知」によって伝えられるだろうかという。これは『朱子語類』・『朱子四書或問小註』に基づく。しかし、「聞知」の湯・文王・孔子は、「見知」の禹・皐陶・伊尹・萊朱・太公望・散宜生から聞いて知ったのではない。そもそも禹・皐陶と堯・舜、伊尹・萊朱と湯、太公望・散宜生と文王とは、それぞれ同時代人である。もしも湯と文王と孔子とがそれぞれ禹・皐陶などの「見知」した人たちから聞いて知ったというならば、禹・皐陶などの「見知」した人たちがいなければ、それぞれ堯・舜と湯と文王から聞くことができないのであろうか。理としては通じがたいことである。この章で用いられる「若」字は、ただ並列していることを表わしているだけである。それぞれの時代にこのような人がいて、道統を知ったというにすぎない。禹・皐陶が「見知」したので、それを承けて湯が「聞知」したというのではない。この章の大意は、「五百年の間には同時代では必ず道統を「見知」する人があり、時代を異にすれば必ず道統を「聞知」する人がいる。いま、私（孟子）は孔子と時代を共にすることはできなかったけれども、場所も時も近いので、同時といってもかまわないであろう。もし今道統を「見知」する人がなければ、五百年のはるか遠い後、道統を

「聞知」する人があらわれるであろうか」、というのである。おそらくこれは、孟子は道統を「見知」したことを自任しているもののはっきりとは言えず、反語表現を用いて述べたのであろう、という。

このように、孟子のこの章では「見知」・「聞知」をどのように理解するかが議論されてきたようである。そこで、この章の「見知」・「聞知」と末節の「然而無有乎爾、則亦無有乎爾」二句はどのように理解されてきたのかを張甄陶（字は希周。福建閩縣の人。乾隆十年乙丑科〔一七四五〕二甲十五名の進士）の『四書翼註論文』（乾隆四十二年〔一七七七〕自序）にしたがって検討してみたい。

まず、張甄陶は末節の「然而無有乎爾、則亦無有乎爾」二句の意味は言外にあり、漢の趙岐も、以後の宋・元・明の諸儒も正しく理解していないと言う。ただ、清の王歩青の意見がしたがうことができるとする。そして、それぞれの議論を検討してゆく。

「然而〔無有乎爾、則亦無有乎爾〕」二句の意は言外に在り。趙岐の『孟[子]』に註するに從えば即ち其の解を得ず。宋・元・明の諸儒の説と近日の講章とは、皆な善く體會せず。惟だ王罕皆（王歩青：字は罕皆，号は已山。江蘇金壇の人。康熙十一年〔一六七二〕～乾隆十六年〔一七五一〕。雍正元年癸卯恩科〔一七二三年〕三甲八十六名の進士）先輩の『〔四書〕本義滙參』のみ能く虚婉の處もて體貼（うまく理解）し、字句に拘わらず。

（2）趙岐は次のような注をつけている。

「至今」とは、今の世に至るなり。孟子の時に當るなり。聖人の間に必ず大賢名世なる者有り。百有餘年 適たま以て出づる可し。未だ遠しと爲して有る無きことならざるなり。魯・鄒は相い近し。傳に曰く、「魯 柝を撃てば、鄒に聞こゆ」（『左傳』哀公七年），と。近きの甚だしきなり。言うところは己 以て孔子の道を識り，能く奉じて之を行うに足るも，既に聖人に値（遭遇）し，伊尹・呂望の輔佐を爲すが若くならず。猶お名世（『孟子』公孫丑下に「五百年必有王者興，其間必有名世者」）に應備すること，傳説の高宗に中出するが如くす可きなり。然り而して世 之れ「有る無し」と謂う。此れ乃ち天の我をして道を行なわしめんと欲せざるなり。故に重ねて之を言う。天意を知るの審かなり。「則亦」と言う者は，實に有る無きに非ざるなり。則ち亦た當に有ること無しと爲さしむべきなり。「乎爾」とは，歎じて怨みざるの辭なり。

其の説 従う可し。今、一一 之を左に辨ず（嘉慶十五年〔一八一〇〕重鐫『四書翼註論文』卷之三十八・孟子盡心下・二十五葉・「由孔子而來，至於今，百有餘歲。去聖人之世，若此其未遠也。近聖人之居，若此其甚也。然而無有乎爾，則亦無有乎爾」条）。

最初は、趙岐の議論である。趙岐は、孟子は孔子の道統を知るに足る人物であるが、聖人に会って、伊尹や太公望が政治を補佐したようなことが行なえなかったとする。こうした解釈は、唐・宋の人たちにも受け継がれていった、という。

趙岐の註に云う、「言うところは已 以て孔子の道を識るに […] 足るも、聖人に値（遭遇）し、伊尹・呂望の輔佐を爲すが若くならず。猶お名世（『孟子』公孫丑下に「五百年必有王者興，其間必有名世者」）に備う可く、高宗の傳説が如くするは、世 之れ「有る無し」と謂う」と。孫奭 疏を作り、其の説に扶同（附和）⁽³⁾す。朱註は未だ作らず。唐・宋人『孟子』を読むに皆な之に遵う。此の註の陋は人の共に知る所なり（嘉慶十五年〔一八一〇〕重鐫『四書翼註論文』卷之三十八・孟子盡心下・二十五葉・「由孔子而來，至於今，百有餘歲。去聖人之世，若此其未遠也。近聖人之居，若此其甚也。然而無有乎爾，則亦無有乎爾」条）。

次は、朱子注に引用される宋の林之奇の解釈である。林之奇は、「見知」する
(3) 孫奭の『孟子注疏』は、このところを次のように理解する。

正義に曰く、……孔子より以來、今に逮び至るまで、但だ百有餘歳なり。其の孔子の世を去るを以て、此の如く之れ未だ遠からず、鄒國より魯國に至るは、其の地 相い去ること、此の如く之れ甚だ近し。然り而して猶お名世（『孟子』公孫丑下に「五百年必有王者興，其間必有名世者」）に應備すること、傳説の高宗に中出するが如くす可し。然り而して世の以て此の名世にして間に出る者有る無しと謂う。乃ち天 我をして道を行なわしめんと欲せざるなり。故に「然而無有乎爾，則亦無有乎爾（然り而して有る無くんば、則ち亦た有る無けん）」と曰う。此れ已に歸さんと欲して、世代を歴擧して之を言う所以なり（『孟子注疏』卷十四下・「孟子曰、由堯・舜至於湯，五百有餘歳。若禹・皋陶，則見而知之，若湯，則聞而知之。由湯至於文王，五百有餘歳。若伊尹・萊朱，則見而知之，若文王，則聞而知之。由文王至於孔子，五百有餘歳。若太公望・散宜生，則見而知之，若孔子，則聞而知之。由孔子而來，至於今，百有餘歳。去聖人之世，若此其未遠也。近聖人之居，若此其甚也。然而無有乎爾，則亦無有乎爾」条）。

ことがなければ、後世の人は「聞知」することはできないとして、「見知」を重視する。ただ、朱子の注で林之奇の解釈を引用した後で、「愚 按ずるに」として述べられる朱子の「孟子は自分からは、あえてもう道統を得て、後世にその継承が失われてしまうことを憂えているとは言ってははいないようではあるが、実際にはその道統を受け継ぐことを辞さないということを示している」という理解が、趙岐などの古注よりもよい、という。

次は則ち朱註の引く所の林氏、乃ち三山の林氏之奇宋の名臣、字は少穎なり①。『朱子全書』に云う、此れ惟だ林少穎 某に向（対）して説き得て好し。[「若禹・皋陶、則見而知之、若湯、則聞而知之」は、蓋し曰く、] 若し前面に「見て知る」を得るに非ざれば、後の人 如何に聞き得ん。孟子は聖人の世を去ること此の若く其れ未だ遠からず、聖人の居に近きこと此の若く其れ甚だし。然り而して已に「見て之を知る」者有る無ければ、則ち五百歳の後、豈に復た「聞きて之を知る」者有らんか、と（『朱子語類』卷六十一・孟子十一・盡心下・「由堯舜至於湯章」条）。[それに対して] 朱子の謂 最も好き者なり②。其の反言を以て、以て之を決す。趙岐・孫奭の古註に較べて理に近し爲す。若し之を正言すれば、則ち顔 [回]・曾 [子]・子思は一齊に地を掃い、即ち孟子も亦た以て自ら處る無し。故に朱子の自註に、則ち敢て已に其の〔道統の〕傳を得と謂わずと雖も、然れども正に自ら其の得て辭せざる者有るを見す所以なり、と云う。此の二句已に正意を將^もって説き出だす。後人 朱子の言外の意を察せず、林氏の説を拘守すれば、則ち之を失う（嘉慶十五年〔一八一〇〕重鐫『四書翼註論文』卷之三十八・孟子盡心下・二十五葉～二十六葉・「由孔子而來、至於今、百有餘歲。去聖人之世、若此其未遠也。近聖人之居、若此其甚也。然而無有乎爾、則亦無有乎爾」条）。

①朱注には、「林氏曰、孟子言孔子至今時未遠。鄒魯相去又近。然而已無有見而知之者矣、則五百餘歲之後、又豈復有聞而知之者矣（林氏曰く、孟子 言う孔子 今の時に至るに未だ遠からず。鄒・魯 相

い去ること又た近し。然り而して已に「見て之を知る」者有る無ければ、則ち五百餘歳の後、又た豈に復た「聞きて之を知る」者有らんや」と引用される。

②朱注に「愚（朱子）按ずるに、此の〔孟子のこの〕言は、敢て自ら已に其の〔道統の〕傳を得、後世遂に其の傳を失うことを憂うと謂わざるが若しと雖も、然れども乃ち自ら其の辭するを得ざる者を見ず所以なり」。

第三は、宋の張栻の理解である。張栻は、末句の「則亦無有乎爾」は、「則ち亦た〔五百年あまり後に道統を知ることが〕有ること無し」と読むのではなく、疑う意味で「則ち亦た〔五百年あまり後に道統を知ることが〕有ること無からんか」と理解すべきだとする。それは、孟子は孔子から「聞きて之を知る」人物だったためである。そうすると、自らを道統を受け継ぐ立場に置かず、ただ将来の人に期待する気持ちが深くなる。こうした理解は、最もこの章の語氣を得ている。ただ、後の人たちは、朱子が注釈に引用していないことから、したがおうとはしない、という。

第三説は、則ち張敬夫（宋・張栻。字、敬夫。号、南軒）先生なり。『孟子説』に云う、「則亦無有乎爾」は、遂に無きに非ざるなり、之を疑うなり。孟子 孔子に於いて實に「聞きて之を知る」なり。然らば其の言 此の如し。敢て自ら其の傳に居らず、其の來學を待つ意 深し、と（『南軒孟子説』卷七）。此の説 最も語氣を得。後人 朱子の引く所に非ざるを以て肯て之に従わず（嘉慶十五年〔一八一〇〕重鐫『四書翼註論文』卷之三十八・孟子盡心下・二十六葉・「由孔子而來、至於今、百有餘歲。去聖人之世、若此其未遠也。近聖人之居、若此其甚也。然而無有乎爾、則亦無有乎爾」条）。

第四は、明の林希元の解釈である。林希元は、孟子自身は道統を「見知」したと自任し、五百年後には「聞知」するものが出るだろうと述べたと理解する。この理解は、従来の理解を打ち破るものではあるが、『孟子』離婁下にある「私ひそかに諸これを人よに淑くする」という孟子の発言と矛盾が生じてしまう。そこで、李

東陽はその八股文で、「見知」・「聞知」を同列に取り扱い、区別していない。そもそも、「見知」は「聞知」のちょっとしたところから導きだされてくるものである。道統の継承者を待って、はじめてその人から伝授されて知るというものではない、という。

第四説は是れ林次崖（林希元：字は茂貞，号は次崖。福建同安の人。正徳十二年丁丑科〔一五一七〕の三甲一百七十七名の進士）なり。『存疑』に謂う、孟子は力めて「見知」を以て自任して、五百年の後、必ず「聞きて之を知る」者有らんとする。藏往（心中にためておく）の氣 拘攣（束縛）を破るに足る。然れども「私かに諸を人に淑くする」（『孟子』離婁下「予未得爲孔子徒也，予私淑諸人也」）と〔孟子が言っていることと〕自ずから相い矛盾す。李東陽少師の程文は、「見知」・「聞知」 平還にして輕重を分かつ。〔そもそも〕湯は業を禹・皐陶の門徒に受けず、孔子も亦た道を散宜生の弟子に得るに非ず。「見知」は「聞知」の拘墟（わずかな）の見に起き、亦た知る者を待たずして後に之を知る（嘉慶十五年〔一八一〇〕重鐫『四書翼註論文』卷之三十八・孟子盡心下・二十六葉・「由孔子而來，至於今，百有餘歲。去聖人之世，若此其未遠也。近聖人之居，若此其甚也。然而無有乎爾，則亦無有乎爾」条）。

第五は、張羽臣の理解である。張羽臣は、孟子を「見知」・「聞知」の道統の系列にはあてはめられないとする。それは、孔子以後の道統の伝授は、「見知」・「聞知」の枠組みから解き放たれたものとなっているからである、とする。この解釈は、きわめて正しいと思えるが、まがりくねって自然に理解しにくいものである、という。

第五説は、張羽臣なり。〔張羽臣〕云う、堯・舜以來、「見知」は皆な同時に在り、「聞知」は皆な五百年の外に在り。孟子 孔子に於いて「見知」なれば則ち已に晩く、「聞知」なれば則ちはな太はだ早し。然り而して「此」と云う者は①、孔子以上は、道統は上に在るを以て、其の道行なわる。故に五百歳を俟つ可し。孔子以後は、道統は下に在るもて、其

の道 明明たる者なり。久しく味ければ則ち失墜の憂有り、と。此の説甚だ是なり。但だ稍や周折（紆余曲折）を費やし、漸近にして自然なる能わず（嘉慶十五年〔一八一〇〕重鐫『四書翼註論文』卷之三十八・孟子盡心下・二十六葉・「由孔子而來、至於今、百有餘歲。去聖人之世、若此其未遠也。近聖人之居、若此其甚也。然而無有乎爾、則亦無有乎爾」条）。

①『孟子』盡心下に「由孔子而來、至於今、百有餘歲。去聖人之世、若此其未遠也。近聖人之居、若此其甚也」。

第六は、王歩青の理解である。王歩青は、「見知」を重視する説を認めない。孟子は「去聖人之世、若此其未遠也。近聖人之居、若此其甚也」と言い、はっきりと自分自身のことを持ち出し、末の「然而無有乎爾、則亦無有乎爾」二句で、そのことを忽然として振り回している。深意はこの二句に挟まれたところにある、という。

王罕皆（王歩青）先輩 「見知」の説を側重（偏重）するに於いて概して刪削を加え、但だ虚還を用う。[そして] 云う、細かく本文を味わうに、世近く、居 近きの[文の末の] 兩つの「也」字は、停頓の處なり①。明明に自己を打着（かかげる）す。末二句は、忽然と掉開（振り回す）して限り無し。深情 正に兩邊の夾拱する處に在り。善く本文を體する者は、當に吾が言を以て然りと爲す、と（嘉慶十五年〔一八一〇〕重鐫『四書翼註論文』卷之三十八・孟子盡心下・二十六葉・「由孔子而來、至於今、百有餘歲。去聖人之世、若此其未遠也。近聖人之居、若此其甚也。然而無有乎爾、則亦無有乎爾」条）。

①朱注に「去聖人之世、若此其未遠也。近聖人之居、若此其甚也」。

そして、最後に張甄陶は、王歩青の理解がもっとも適切であるという。孟子はただ今日に道統を継承してはっきりさせなければ、後世には分からなくなつて失われてしまうとだけ言っているだけである、というのである。

按ずるに、此の章の關係 重大なり。孟浪（輕率）に附和する可からず。惟だ王氏（王歩青）の此の説 最も其の解を得。孟子は只だ今若し負荷（受

け継ぎ) 修明 (はっきりさせる) せざれば、則ち將來に必ず晦沒失墜するに至ると言及す……(嘉慶十五年〔一八一〇〕重鐫『四書翼註論文』卷之三十八・孟子盡心下・二十六葉～二十七葉・「由孔子而來、至於今、百有餘歲。去聖人之世、若此其未遠也。近聖人之居、若此其甚也。然而無有乎爾、則亦無有乎爾」条)。

このように張甄陶は、六つの議論を検討し、王歩青のものがもっともすぐれていると判断する。

ちなみに、王歩青の『四書集註本義滙參』(乾隆十年〔一七四五〕刻)では「見知」・「聞知」について次のように述べている。

〔愚按〕此の章「見知」の説を側重(偏重)するは、皆な此の〔由孔子而來、至於今、百有餘歲。去聖人之世、若此其未遠也。近聖人之居、若此其甚也。然而無有乎爾、則亦無有乎爾〕條に託始(由來)す。竊かに謂えらく、『集註』は止だ林〔之奇〕氏④の下半截を採るのみ。而して其の上半截の「若し前面に見て知り得るに非ざれば、後の人 如何に聞きて之を知らん」と云うに於いては、則ち節去して載せず。蓋し止だ下半截のみを採れば、則ち本文の語氣を體貼(細心に理解する)し渾然たるを自覺す。若し上半截を兼ね載せば、則ち誠に後來の講家の専ら「見知」を重んずるが如し。即ち『或問小註』も亦た「道統 繩繩として相い續きて絶えざる者は、實に時を同じくするの「見て之を知る」者は之を先に知るに頼る。世を異にしての「聞きて之を知る」者は、以て之を後に知るを得るのみ」(康熙四十一年刻『朱子或問小註』孟子卷十四・二十一葉・「由堯舜至章」条)、と。此れ正に林氏の上半截の意と同じ。然らば愚 謂えらく、恐ら

✓(4) 王歩青の『四書集註本義滙參』(乾隆十年〔一七四五〕刻)では次のようになっている。

細かく本節を味わうに、世 近く、居 邇きの〔文の末の〕兩つの「也」字は、停頓の處なり。明明に自己を打着(かかげる)す。末二句は、忽然と掉開(振り回す)して限り無し。深情 正に兩邊の夾拱する處に在り。善く本文を體する者は、當に吾が言を以て然りと爲す(『四書集註本義滙參』卷十四・五十三葉・「由孔子而來、至於今、百有餘歲。去聖人之世、若此其未遠也。近聖人之居、若此其甚也。然而無有乎爾、則亦無有乎爾」条)。

くは皆な朱子の定論に非ず、と。若果し以て然りと爲せば、何ぞ『集註』に於いて並びに未だ明文有らずして、第だ大意を渾舉し以て之を櫟括（まとめる）せんや（『四書集註本義滙參』卷十四・五十三葉・「由孔子而來、至於今、百有餘歲。去聖人之世、若此其未遠也。近聖人之居、若此其甚也。然而無有乎爾、則亦無有乎爾」条）。

①「然而無有乎爾、則亦無有乎爾」を問う。曰く、惟れ三林の林少穎（林之奇）向某に向かいて説き得て好し。「若禹・皐陶、則見而知之、若湯、則聞而知之」は、蓋し曰く、若し前面に「見て知る」を得るに非ざれば、後の人如何に「聞きて之を知」らん。孟子は聖人の世を去ること此の若く其れ未だ遠からず、聖人の居に近きこと此の若く其れ近し。然り而して已に「見て之を知る」者有る無ければ、則ち五百歳の後、豈に復た「聞きて之を知る」者有らんや、と。去偽（『朱子語類』卷六十一・孟子十一・盡心下・「由堯舜至於湯章」条）。

この章で「見知」を重視するのは、「由孔子而來、至於今、百有餘歲。去聖人之世、若此其未遠也。近聖人之居、若此其甚也。然而無有乎爾、則亦無有乎爾」節に由来している。王歩青は次のように考える。朱子の『集註』は、『朱子語類』に引用される林之奇の説の下半分を採用しているだけである。『集註』は引用するにあたって、上半分の「若し前面に「見て知る」を得るに非ざれば、後の人如何に「聞きて之を知」らん」を削除している。下半分のみを引用しているということは、本文の語気を細心に理解して、それが渾然としているのがわかっていたのである。もしも、上半分もあわせて引用すれば、「見知」を重視するものになってしまう。『朱子或問小註』も林之奇の上半分の説と同じである。しかし、これらは朱子の定論ではない。何故ならば、もしも『朱子或問小註』などの理解が朱子の定論であれば、朱子は『集註』ではっきりとさせ、大意を渾然とさせたような理解などは示さないのではないだろうか、という。

続けて、王歩青は言う。

且つ試みに本文を通味するに、其れ「由堯舜至湯」・「由湯至文王」・「由文

王至孔子」と曰うは、自ずから是れ聖聖 相い傳うるの嫡派なり。其の兼ねて「見聞」と敘する者は、時を同じくして若而人（此の如きの人：『春秋左氏傳』襄公十二年）有り、世を異にして若而人（此の如きの人）有りと謂うに過ぎず。皆な「之を知る」の統に與かるを得て、歴歴（逐一）として考う可きのみ。實は則ち「見」と「聞」とは、俱に堯・舜・湯・文[王]を主として言う。湯の「聞」は、之を堯・舜に於いて「聞」き、専ら之を禹・皐[陶]に於いて「聞」くに藉るに非ず。文[王]の「聞」は、之を湯に於いて「聞」き、専ら之を伊[尹]・萊[朱]に於いて「聞」くに藉るに非ず。孔子の「聞」は、之を文王に於いて「聞」き、并せて以て之を湯に於いて、堯・舜に於いて聞く。豈に専ら之を[太公]望・散[宜生]に於いて「聞」くに藉らんや（『四書集註本義滙參』卷十四・五十三葉・「由孔子而來、至於今、百有餘歲。去聖人之世、若此其未遠也。近聖人之居、若此其甚也。然而無有乎爾、則亦無有乎爾」条）。

「堯舜から湯へ」・「湯から文王へ」・「文王から孔子へ」というのは、聖人の継承の本流である。これらの聖人を「聞知」としているのは、年代を考慮して言っているのである。「見」と「聞」とは、堯・舜・湯・文王を主として言い、湯は堯・舜に「聞」いたのであり。禹・皐陶から「聞」いたのに基づいていないし、文王は湯に「聞」いたのであり伊尹・萊朱から「聞」いたのに基づいていないし、孔子は文王・湯・堯・舜に「聞」いたのであり太公望・散宜生から「聞」いたのに基づいていない、という。

そして、

末の「〔然而無有乎爾、則亦無有乎爾〕」二句に至りては、亦た只だ従前の大槩に就きて相い提[示]して論じ、既に「見知」有る無ければ、則ち亦た復た「聞知」有る無きを見得す。其の詞は危うく、情は迫り、此れ絶・續の交わりを「見」・「聞」するに當りて、心有る者なり。自ら處る所以を思わざる可からざるのみ。亦た必ずしも定めて「見知」を以て自任し、顔[回]・曾[子]の輩を數うるに足らずに置くに非ざるなり。⁽⁵⁾蓋し一たび

粘煞（すりあわせてゆく）すれば、則ち語病 百出す。故に『集註』 只だ他の渾然に還すは、自ずから是れ朱子の深意なり。講家 凡そ「見知」を重見する者は槩して敢て載せず（『四書集註本義滙參』卷十四・五十三葉・「由孔子而來、至於今、百有餘歲。去聖人之世、若此其未遠也。近聖人之居、若此其甚也。然而無有乎爾、則亦無有乎爾」条）。

という。末の「然而無有乎爾、則亦無有乎爾」句は、前のあらましを提示して論じ、「見知」がなければ、「聞知」もないことを示している。その言葉は切迫しており、「見」・「聞」の断絶に際して、自分の立場を思い至っている。また、「見知」を自任し、顔回・曾子を数えるに足りないとしているのではない。おそらくひとつに収斂してゆけば、多くの問題が出るので、朱子は『集註』で渾然とした解釈を示したのであろうというのである。

また、清の乾隆三十五年〔一七七〇〕に刊行された『四書題鏡』には、この章全体を次のよう理解して八股文を書くようにという。

此れ道統の傳を歴叙し、之を終えるに「孟子が道統を受けるといふ」自任の意を以てす。己の統を孔子に得るを明らかにするなり。前の三節は、歴叙して來り、述（遞）して孔子を重んず。末節は「今」字を重んじ、自家

（5）何如澹（廣東南海の人。雍正十一年癸丑科〔一七三三〕三甲二十六名の進士）の『四書講義自得錄』（乾隆二十五年（一七六〇）序）に、次のようにある。

末の「然而無有乎爾、則亦無有乎爾」二句は、今 既に「見知」無ければ、則ち五百年の後、便ち「聞きて之を知る」能わずとすれば、則ち語氣と本文と類せず。且つ『集註』も亦た未だ嘗て此の意有らざるなり。予（何如澹）此の説を持するも、衆皆な之を非とす。惟だ王罕皆（王步青）のみ予（何如澹）と全じ。但だ罕皆（王步青）

謂う「孟子は必ずしも定めて「見知」を以て自任するに非ず」は是れ「其の詞は危うく、情は迫り、此れ絶・續の交わりを「見」・「聞」するに當りて、心有る者なり。自ら處る所以を思わざる可からざるのみ」、と。其の説 註と合わず、故に敢て取らず。罕皆（王步青）謂う『語類』の取る所の林[之]奇の「若し前面に見て知り得るに非ざれば、後の人 如何に聞きて之を知らん」に於いては、一截して、原より未だ嘗て採入せず」・『[朱子] 四書或問小註』に至りては、朱子の定論に非ず。否ざれば則ち『集註』何を以て並びに明文無く、第だ大意を渾擧し以て之を括（まとめる）めんや、と。此の論 甚だ見る有りと爲す。時説の誤りを破るに足る（『四書自得錄』下孟自得錄卷之十・五十一葉・「由堯舜至於湯章」条）。

の身上に歸り到りて結穴（帰結させる）す。隱然として先を守りて後を待つ
つの意有り。○大意は「以下のように」謂う。道統 絶えず、必ず之を
知るの人有り。即ち已往は以て將來を信じ、孔子の道、斷じて中絶せず。
須く一氣もて章末の二つの「有」字を趕重すべし。○人 下節の「則亦
無有」句に因りて、遂に預め上の三節を將^もって、亦た「見知」を側重（偏
重）す。〔しかし〕上の三節は只だ閒閒に叙述し、並びに「聞知」は「見
知」に由るの意無し。一たび「見知」を重んずれば便ち平叙の語氣を碍^{さまた}
ぐ。末節の若きは、「見知」を以て自任するを明らかにす。平説するが若
きは、又た語意に非ず（『四書題鏡』下孟・盡心下・二十五葉・「堯舜章」
条）。

この章は、道統がどのように伝わってきたのかを述べ、最後に孟子がその道統
を受け継ぐことを自任しているという意味である。そして、大意としては、道
統は中断することがなく、必ず受け継ぐ人が存在する。つまり、前の人は後の
人が道統を受け継いでくれることを信じるという語気で末句の「然而無有乎
爾、則亦無有乎爾（然り而して〔孟子の時に道統を知るということが〕有ること
無ければ、則ち亦た〔五百年あまり後に道統を知るということが〕有ること
無からん）」を持ち出すべきであると考え。そして、ふつうは下の「則亦無
有乎爾（則ち亦た〔五百年あまり後に道統を知るということが〕有ること無か
らん）」句が「見知」に関係することから、上の三節（孟子曰、由堯・舜至於
湯、五百有餘歲。若禹・皋陶、則見而知之、若湯、則聞而知之。由湯至於文
王、五百有餘歲。若伊尹・萊朱、則見而知之、若文王、則聞而知之。由文王至
於孔子、五百有餘歲。若太公望・散宜生、則見而知之、若孔子、則聞而知之）
でもやはり「見知」を偏重しているとする。しかし、上の三節はただ「見知」・
「聞知」を並列して述べているだけであり、「聞知」は「見知」からきたもの
ではない、つまり道統は「見知」によって伝えられ、それによって「聞知」し
て伝わるというのではないということが分かっている。また、ひとたび「見
知」のみを重んじたならば、三節で並列されている語気を損なってしまう。た

だ、末節は、孟子が「見知」によって道統を受け継いだと自任していることを明らかにすべきである。語句の表面のみを述べたならば、末節の意味はなくなる、という。

このように「見知」と「聞知」とのうち、「見知」を重視する解釈については批判が多い。ただ、乾隆年間になっても、たびたび批判されているということは、「見知」を重視して八股文を書くということが一般的であったのであろう。

では、李東陽の八股文では、「聞知」と「見知」とはどのように理解されているのだろうか。

(つづく)